動詞変格活用成立論

石田春昭

一、変格活用各個の形態的特質

上代日本語の活用の型が八種類あったうち、四段活用は語尾の母韻の交替による五つの活用形から成り、上一段活用は語基とこれにルレの付着したものとによって、また上下の二段活用は二つの母韻の交替とルレの付着とによって組織されて居た。而して活用形成立の順序は、母音交替によるものが一次的であり、ルレの付着が二次的であることは言ふまでもないが、ルレ語尾は上一段活用においてさへ、動作詞たる動詞の意義の成立に関与して居ないことがこれを有力に証明する。

変格活用四種のうち、良変はルレ語尾を持たず母音交替のみによって活用体系を形作り、各の母音の分担する職能も殆んど四段活用と差違がない中に、終止形のみが四段活のuに対してiであって連用形そのままである処に特色がある。だから良変は四段活の一変種にすぎない。

奈変も母音の交替及びその職能分担は四段活と同じであるにかかはらず連体形已然形にルレ語尾をもって居る点が四段活と違ふ。而してルレ語尾が二次的の付着であることは前記の通りであるから、これも成立過程からしてやはり四段活の一変種とすべきものである。

加変は上二段の変種の様に考へた人もあるが、上二段とは終止連体已然の三形を同じうするのみで、むしろ今一つ連用形をも同じうする所の奈変や左変と近いのである。このうち奈変は未然命令異形であるのに対し、此の二形を共通形(1)とする点において左変と特に近い関係にあると言へる。而してその共通形の母音がöである点(2)に加変の特色が存するのである。

左変とサ行下二段活とは一見したところでは連用形以外は全部同形のやうに見えるが、セに甲乙の別があった時代ありとすればサ行下二段の共通形は乙類であった筈であるが、左変の共通形はその種に考へるべき根拠がない。その上左変のセは更に古に遡のぼればSöであったと考へられること下に述べる通りで、従って加変と全く同じ活用をなしたものと考へられる。この二種を一緒にして三段活と称した人(3)があるが、これは右の点を確認することによって始めて有意義になるのである。

本稿は変格動詞の活用形のすべてについて考察することを企図するものではない。四段・一段・二段など、いはゆる正格活用と同じ活用形については、その方の考察の際に譲り、今はただ前記の如き変格活用の特異点についてその成立を論じようとするので

ある。

二、変格活用共通の特質

上には変格活用各別の特色について述べた。次に四種類を通じての特色と見るべき点について述べて見たい。

(一) 変格活用の特色は各々が五十音図の一つの行に限って活用する処にあるが、更に突きつめると四種とも各一語に帰してしまふのである。即ち良変所属とされるもの四語のうち居リ・侍リ・イマスカリの三つはアリを含み(4)、奈変の死ヌは往ヌを因子として成立したと考へられる。また加変にはク(来)、左変にはス(為)の各一語(5)しか無い。これに反し正格活用の四種類は、所属語彙の最も少い上一段活でさへ、少くともカ・ナ・マ・ヤの四行(6)に亘って居り、またこれらから i, iru, ire を抽出しても、かかる単語がかって存在したとは考へられない。語彙の多い二段活や四段活においては尚更である。かくて変格活用は結局、四個の単語のみが群を離れて各独特の活用体系を持つといふことに帰する。単語であれば形態論機能論の外に意義論ないしは語源論語史論的考察を加へることも可能となる。

(二) 今一つ変格活用には重要視すべき特色がある。それは助動詞または補助動詞として一般動詞の機能を助け、或は単語の構成要素となって動詞の語彙を豊富にしたものに、変格活用から出たものが非常に多いことである。

(イ) 往ヌからは完了の助動詞ヌが出て居り、(ロ)「来(ク)」からは過去の助動詞キ・ケリ・ケムが出て居る。(ハ)在リを因子とする助動詞ないし補助動詞にはケリ・タリ(完了)・タリ(指定)・ナリ・リ・メリ・ザリ・ベカリ・タ・ダ・ヂャ・ヤル・ゴザル・オヂャル・オリャル等がある。また相の助動詞ル・ラルは在りから来て居るといふ説があり、ラ行四段活目動詞のうち三音節以上の語の多くは在リを因子とすると考へられて居る。(ニ)「為(ス)」から出た助動詞にス(古代敬語・四段)ス(平安朝敬語・使役・下二段)サス・ズがあり、マス(敬)マヲス・マラス・マス(丁寧)・見ス・聞コス寝ス等の敬譲語のほか、サ行四段・サ行下二段活動詞には、このスを語尾に持つものが非常に多い(或は全部か)と考へられる。

助動詞は前記以外で重要なものとしてはヌ・ム・ツ・ベシ・シムなどがあるのみであり、派生動詞もル・スを語尾とするものに匹敵するものはない。かくて変格活用の動詞は一般動詞の機能の発揮に、また語彙の拡充に非常な貢献をして居るのであって、若しこの四種なかりせば日本語の歴史は全く変った様相を呈したに相違ないのである。

以下四種の変格活用について、その特色たる点が如何にして生じたかを考へようとするのであるが、特色ある活用形を持つに至ったについては種々の事情が原因して居ると思はれるので、これを列挙しておく。

(イ) 個々の動詞の母体となった語の意味と音韻
(ロ) 初発の活用形
(ハ) その動詞特有の意義
(ニ) 音節数
(ホ) 同系統の語の影響
(ヘ) 音韻法則の時代差

三、良行変格活用

語の成立　内包が豊かで外延の狭い概念は成立が容易であるが内包が稀薄で外延の広い概念は成立が容易でない。だから文化の低い民族は、意味の甚だしく限定された沢山の動詞を持って居る反面、これを総括するやうな語を持って居ないと云ふ。自分も或る島で相当の年輩の者が「ジイジイガ、ミンミン、イッチョル」といふのを聞いて驚いたことがある。

存在するものにはすべて具体性がある。吾々の感覚を刺激すべき特殊な点を持って居る。しかし存在そのことには内包が殆んど考へられない。ものの存在が吾々の感覚を刺激すると言へるとしても、その刺激は千差万別である。従って存在の概念はその外延が無限に広汎であって、この様なものに名を与へることは難事中の難事に属する。かかる困難の中から古代日本人はいかにしてアリといふ語を生み出したか。

自分は考へる。存在の概念と関連のある他の概念があり、それを表はす語は〔a+r+中略〕といふ形であった。上代人はこれを応用したのであると。尤もこれは自分の独創ではなく、アリはアレ（現、生）から来て居ると考へた人(7)がある。出現といふ現象は吾々の感覚に特定の刺激を与へるから、これを表はす語の創造は比較的に容易であったであらう。また出現の意味から存在の意味に移ることも可能である。しかしアリが四段活用の一種であるのに対し現レは下二段活である。而して下二段活所属の動詞には四段活用から voice を変へるため、二次的に作られたものが多いが、その反対に下二段活から同行活用の四段動詞の作られた例は殆んど無いやうである。だからアレ→アリといふことは形態論的には可能性が少い。しかもアリとアレとは無関係とは考へられない。これをいかにして解決するか。

ここにアラハ・アラハル・アラタ・アラミカミ・アラハニゴト等一連の語がある。これらを通じ、アラといふ語根が存し、この語根は新鮮・顕露・現実・出現等の意味の範囲に振幅を持って居たことがわかる。而して存在の概念はこれらの隣りに位置するものであるから、アラの振幅はここまで及び得たと思はれる。かくしてアラを母体とし、一般四段活用の成立とほぼ同じ過程を経て在りの活用体系が生じ、また一方では一般下二段活用成立の過程を経て、現レの活用体系が生じたと考へられる。而して良変の未然形は語根そのままであると考へるのである。

活用の成立　次に一般四段活用の終止形が u 韻である中に在り、リの終止形が i 韻であって四段活の変種となった原因を考へる。

一般動詞活用形成立に関する大野晋氏の説(8)はその着想に於て、その準備及び論証に於て新時機を画するものであって、特に

(1) 各活用形の成立が接辞（詞または辞）の付着によるといふ考へ方を導いたこと

(2) 終止形は連用形にウ（居）の付着によって生じたといふ説は終止形が進行形あるいは現在形である理由をよく説明するものであること

(3) 良変に限って連用形がそのまま終止形となったことの説明が容易につくこと

などは当面の問題の解決に光明を齎らすものであるが、たゞ(1)ウ

(居)の意味はもと坐することであったこと、(2)ウは動詞キ・ウの活用成立以前の形でなくてはならぬが、それはウよりもヲ(ヲリのヲ、これにアリが付着して存在の意味になった)であったと考へられ、(3)傍証とせられた土佐方言は降リウでなくて降リューであり、これは降リュール(降リヨル)のル脱であると考へられる。かくしてウの付着説は卓見と思ひながら暫く採用を躊躇せざるを得ない。しかし自分には代りの名案があるわけでもない。今はただ四段活の連用形がその負担して居た雑多の職分のうちから文の終止といふ職分のみを新しいu韻の形に移譲したものとして他の方面から考へを進める。

自分は文献以前にあっては一般四段活及び其他の動詞の連用形が文の終止を担当して居た、また他の用言もi韻で終止したと考へる。その証

(1)中止法の存在　中止法なるものは未然形・已然形・終止形に助詞が接して前提法となるのと違って、論理的意味のない、全く無表情の接続法であって、いはば贅沢な形式である(だから今日対話用語としては姿を消した)。恐らく古代に於て連用形すなわちi韻が文の終止に当った面影を留めて居るのであらう(洋服の袖口のボタンの様に)。

(2)形容詞及び同系助動詞の終止形の語尾がシであること

(3)不規則活用の助動詞の終止形が大抵i韻であること。キ・ジ・マジ・マシ・ラシ

動詞が連用形の諸職分の中から終止法だけをさいて新形のu韻のものに移譲したのに(2)・(3)が道連れにならなかったのは何故か。これは形容詞などの語尾のシや助動詞のキは文を終止することが殆んど唯一の職分であったからである。またキは「来」がまだ終止形クを持たない時代に付属化したのである。

(4)終止形付属の助動詞ベシ、マジ、ラシ、ラム、ナリ、メリ　等が古代は連用形に接したこと　見ベシ、煮ラシ、勝チメリ、アリナリ、見ラム

ム・ズ・ケリ・ヌ等は単語としての動詞の語義について推量し否定し或は動作の時を表示する。これに対してベシ・マジ等は動詞の陳述に関して(即ち主語との結びつきに関して)その確実度を限定する。だから陳述を終へた形態に付するのを適当とする。従って連用形で文が終止された時代には連用形に、終止形が新に出来るとこの新形にと、付着基を変へたのである。

(5)禁止のナに連用形が呼応すること

禁止の語に対しては連用形で結ばねばならぬ理由は考へられない。連用形が文を終止した波残りを留めたに過ぎないのであらう。

以上は連用形(i韻)が古代において終止法を担当したといふ推定の根拠を掲げたのであるが、良変の場合は形容詞などとは多少事情を異にして居た。それは良変も動詞の仲間入りしたのであるから、その連用形には文の終止以外にも職分があった。処が一般四段活の動詞はその意味に具体性があるか、独立して体言となり、また連体格にも立った(舞ヒ、浮キ草)。しかし在りは意義の抽象性の故に独立することがなく、いつも存在詞ないし指定詞として、主語を持ち、述語としてのみ用ゐられた。述語はいつも文の下位に来る。またアリは補助動詞としての用法も頻繁であった。連用形+アリ・テアリ・トアリ・来アリ・ニアリ。これが一語となって出来た、リ・タリ(完了)・タリ(指定)・ケリ・ナリがまた文の下位に立った。

かくして良変の一系は連用形時代に、述語として或は述語の補助形式として用ゐられる頻度が高く、i韻即終止といふ結びつきが堅くて離れなくなり、一般動詞には終止法専門のu韻語尾が生じても、良変系統の諸語だけは相団結し、互に牽制しあって新形に走らなかったものと考へられる。中世に至って良変の終止形がu韻となったのは、連体形の侵分といふ、用言一般の現象に随順したのではあるが、消極的方面を言へばリ・タリ・ケリ・ナリ等が、或は亡び或は語尾を失ったために、アリの語形変化を牽制するものが無くなったことも原因になって居ると思はれる。

なほベシ・ラムの類が良変に限ってその連体形につくのは、実は終止形にリとルと二形あって、終止法はリが担当し、ベシ・ラムの付着基となることはルが担当したとするのがよいであらう(9)。

四、奈行変格活用

所属語彙　(イ)往ヌ　石見方言に於てイヌルの意味は現地を去って本拠に帰ることであるが、古典における用例では、現地を去って彼方に姿を消すといふ意味で、本拠に帰るといふ意味は無かったやうである。この姿を消すといふ心持を含む点に於て、否定の助動詞ヌと一脈相通ずるものあることを感ずる。

(ロ)死ヌはシ＋イヌだと説かれる。シは「命はなシ セ給ひそ」「窃みシセむと」と下二段に活用する例があり、これは着セ・見セと同じ成立の使役的他動詞の語幹で、漢語の「死」とは偶合であらう。

(ハ)助動詞のヌ　往ヌから出たことは勿論である。往ヌの補助動詞的用法から始まり、動詞の連用形（i韻）を受けるうちに頭の母韻を失った。行キヌは行き去って姿を消すといふ意味で、姿を消すことは「行ク」といふ動作などでは、動作の完結を示すものである。こんな処から完了助動詞としてのヌが発育して行ったものと思はれる。

活用の成立　始めは四段活用であったと思ふ。それは(1)早く生じたと思はれる未然・連用、これに次ぐ命令・終止の四形が四段活と全く同じである点、(2)二音節である点（四段系三種には一音節語なし）(3)上二段活は属性詞の動詞化されたものが大部を占め下二段活は属性詞的のもの及び自然相的（自然にさうなる）または使役相的の語が大部分を占めるのに対し、四段活（特に二音節のもの）は概して基本相とも称すべき、端的な動作詞であるが、この点イヌは四段活である。(4)中世末期以後四段化したのは本然の姿に立返ったものと言へる。かくして往ヌ・死ヌ・および助動詞のヌはもと四段活用であったと思はれる。

ところが頭音を失って一音節となった助動詞のヌにはその活動に大きな障害が起った。それは全く活用を同じうする否定の助動詞ヌの存在であった。それも四段・良変・加変・左変の様に未然連用異形の場合はよかった、完了のヌは連用形、否定のヌは未然形と付着基を異にして居たから。処が二者同形の上一段活に於ては混乱を生じ、殊に語彙の多い上二段活・下二段活が発生するに及んでは、もとのままでは混乱の防ぎやうがなかった。この混乱を避けるために採用されたのが、文語に見る如き両助動詞の活用体系である（民衆の言語改良は国語調査会よりすこし巧妙である）。

	（未然）	（連用）	（終止）	（連体）	（已然）	（命令）
（完了）	ナ	ニ	ヌ	ヌル	（ネ）ヌレ	ネ

（否定）　ズ　　ズ　　ズ　　ヌ　　ネ　　ー
（ナ）　（ニ）　（ヌ）

完了の四形と否定の二形と合せれば完全な四段活用となることに注意したい。これが両者の元の体系、或は当然到達すべき体系であったのである。否定のナ・ニは奈良時代の文献に沢山の用例を残し、完了の連体形がヌであったと想像すべき証跡もある(後述)。処が否定詞の方は未然・連用・終止の三形を譲って代りにズ（＝ニス）を採用し、完了詞の方は連体已然二形を譲って代りにルレを採用した。かくて重複の回避は実に巧みに行はれたのである。

この完了の助動詞に起った活用の変動は本動詞にも及んだ。これを本末転倒で、在り得ないことの様に思ふ人があるかも知れぬ。併し往ヌとヌとは同身一体で、他の助動詞とその母体との関係の如きではない。その形態、その意味、その接続、殆んど差はなかった。即ち全くの別語ではなかったのである。その上言語運用上における比重の差(辞の優位)、使用頻度の懸隔から言へば、ヌにおける活用の変動が往ヌに及ぶべきは当然のことである。今総索引により万葉集における使用回数を計算すれば左表の通りである。

	(未然)	(連用)	(終止)	(連体)	(已然)	(命令)	(計)
(死ヌ)	三七	一六	二八	一	一	六	八九
(往ヌ)	一七	一五	二	三	二	〇	三九
(ヌ)	九八	二八一	二〇七	三〇	四一	〇	六五七

頻度の比は、

往ヌ：ヌ＝1：17，死ヌ：ヌ＝1：17，

往ヌ死ヌ合計：ヌ＝1：5

である。

中世末期にズが亡びてヌが終止形となったのは連体形の侵分であるが、若し完了のヌが生きて居れば、その終止形はヌ、連体形は死ヌ・往ヌとともに四段化してヌとなり、一段活二段活に接続する場合には、否定との区別がつかなくなったであらう。即ち完了のヌが衰亡して混乱のおそれが失せたために、否定のヌが大手を振って本然の相に立ち帰り得たといふわけである。

奈変の活用体系の成立については連体形の発生が終止形に比して余程後れたであらうといふ前提のもとに自分は論を進めた。これはルレ語尾を持つ種類全部に及ぶことである。連体形後発の証と見るべきものは、

(1) 万葉集に見える助詞ガニ・ガネの接続は、単独のガが連体形所属であり、「生ひは生ふるがに」(東歌)、「乏しぶるがね」(巻十七)と連体形に接続した例が一つづつあるのに他の例は、

〇都留の堤の成りぬがに東歌〇霜も置きぬがに巻八〇あえぬがに花咲きにけり巻八

といふ風に中央語でも地方語でもヌの形でガに続いて居る。このことは東国語において特に甚だしかったらしく、

(2) 〇言はず来ぬかも防人〇越よてきぬかむ(も)防人〇明けぬしだ来る東歌〇間夜はさはだなりぬを東歌。

等の例がある。尤も連体形に対する侵分（いま移譲の留保）は来ルにもあり、東国方言において目立つ。

(3) 〇取りてくまでに防人〇帰りくまでに防人〇行きてくまでと

加変の場合は活用の種類には影響しないが奈変の場合は事情が違

ふのである。

さて東国方言に奈変の活用に異例のあることと、江戸語が徳川時代前期に於て奈変の四段化を終へて居たこと（国語学辞典、中村通夫氏）とは無関係ではあるまい。ルレ語尾（特に奈変のルレ）は西日本方言に於て比較的後期に発生したもので、東国地方にはその浸透普及が十分でなかった。かかる事情から東国武士の興起覇権の確立と共に方言の勢方も東方が優位に立って西国語に影響するに及んで、遂に今日通用語としての奈変の衰亡を見るに至ったものと自分は考へるのである。

已然形に反則の例を見ないのは、確定前提法なるものが古代人にとって、新形の発生を待ち切れないほど、必要不可欠でなかったからである。

（付記）チェンバレン氏は奈行変格活用を以て動詞諸活用の祖と考へた。併しこの考へは服部四郎博士の説によってその根拠を失った（雑誌方言二の七以下）。自分は往ヌの語としての古さは認めるが、奈変としての語法的特色を持つやうになったのは前記の如く語形衝突を防ぐためで、その成立は遅く、二段活の成立よりも後れたと考へるのである。

五、加行変格活用

来の特質　この語特にその命令形（世界各国語について言へば来ルと同意義の語、もし命令形態ある場合は特にその形）は、幾千を数へる動詞のうち、恐らく最も早期に発生したものの随一であらう。この語の不可欠性、意味の単純さ、使用頻度の高さ、大人も子供も、野蛮人も文明人も、友達に対し部下に対し、時には敵に対してさへ、此の語が、特にその命令形が、いかに頻繁に用ゐられて来たことか。吾々が初対面の幼児に向って最初に発する語はこれである、しかも命令形である。今日ではオイデ、イラッシャイが行はれるが、古代においては「コ」の一語しか無かった筈である。筆者は、犬を呼ぶにはコイコイ、鶏を呼ぶにはコロコロ、しかも犬と雞と語るにはこれ一語しか知らない。（犬や雞に向って他の言葉を使ふ場合もあるが、それは彼等が理解すると思って使ふのではない。これに反しコイコイコロコロは正真の会話である）自分は来ルといふ語が非常に早く発生したこと、その活用形は、命令形「コ」から出発したことを信ずるものである。

来の発生　コ（来）はコ（此）であると考へる。コは物をさしてはコレ（話者の手元にあるもの）を意味し、場所をさしてはココ（話者の手元）を意味した。コ（此）をコ（来）に用ゐたのは、（a）話者の方へ（b）這へ（歩め、走れ、近寄れ）と二つに分析せられる観念が、原始時代においては未分化で総合的に表象せられ、それが（a）（目標）を表はす語だけを以て表示されたのである。「母ちゃん、これ」が「これを下さい」を意味するのと同じである。同系語にコフ（乞）とコス（与）とがある。コフは「こちらへこちらへ」を継続する意、コスはコセ・コソと交替し、オコス・ヨコス・ゴス（山陰方言四段活）の源流で贈与を意味し、ともに語幹はコ（此）であって、コ（来）とともに求心力的意味である。

来の活用　右の様に来は命令形のコから出発したのであるが、命令形は動作が未だ実現されず観念中にのみ存するといふ点において、未然形の受持つ主要職分と相通ずるものがある。即ち

仮定・推量・否定・願望などを示す接辞の付着基となり得る性質を持つ。来の未然形が命令形をそのまま襲用し得た理由はここにある。なほ命令は動作の名を言っただけでも事足るのであるから、一段活や二段活のやうに連用形を以て出発したと考へられる種類にあっては、連用形すなはち名詞形が命令形を兼ねたのであるが来の語源コ（此）は体言であるから、此の点からも命令形たり得たのである。

加変の特異性は命令未然形にのみ存するのであるから、連用形以下の四形についてはいま触れない。ただ連用形のキがコよりも後発であることは、連用形に接続すべき過去の助動詞のシや「ナ――ソ」のソが未然形のコを受ける習慣のあったことからも考へられる。連用形のキの職能分担が安定しないうちに、未然形のコとシ・ソの結合を固定し、職分の移譲を留保したのである。

中世以降、動詞各種類の活用に大変動が起ったにも拘らず、またコは他種類に存しないオ韻であるに拘らず、加変は連体形の終止形侵分に止まり命令未然形に微動だに無かったのは此の動詞の本体がコに存したからである。

六、左行変格活用

為（ス）の意味と用法　（a）ス（為）は人間の個々の動作（身体的のもの精神的のもの、積極的消極的と種々様々である）から、それぞれの特殊性を捨てて、一切の動作の共通性だけを表はす。共通性とは人間を主体とすることと時間的変化があるといふことである。

（b）一歩進んで人間を主体としない事件、或は自然現象をも意味した。おのづからさうなる、いはゞ現象するとでも説明すべき場合である。時間的変化といふ点は（a）と変らない。ここまでは世界の言語に恐らく同義語があらう。しかしスの領域拡張はこれに止まらなかった。

（c）時間的変化といふ要素をも捨ててしまった。動作現象の観念から時間的要素を除けば、あとはそれが存在するといふことだけである。スはただ存在だけの意味にも用ゐられた。ここまではそれでもまだ概念（詞）の領域であるが

（d）更に進んで指定詞の領域にまで踏みこんだ。辞となったのである。ナリ・デアルと同じ意味である。（形容詞の終止形もともとヌの交替形が持定詞的の立場で語幹に付着したのであるが、これは単語構造の問題となる。）

今万葉を主としてのスの用例を分類して見る。

（A）動作を表はすもの

(1) 動作を総括的に表はすもの

○言はむすべせむすべ知らに　○いかにしつつか汝が世は渡る

(2) 個々の動詞を代理するもの

○花蔓せよ　○児ろせ手枕　○さかしらをすと　○おほろかにすな　○蔵人して、御随人して、も此部類に入れるべきであらう。

(3) 上に動作性の名詞があり、スは動作性を抽象的に表はすもの（――ヲスル）

○賂はせむ　○新嘗すとも　○浮寝せむ夜は　○少女さびすと　○結ひの恥しつ

(4)
右と似て居るが、上の動詞が動詞たる機能を失はぬもの
○切れば生えすれ　○あどか絶えせむ　○鳴きもしにけむ
○詫びぞしにける　○荒しやしてむ（本項の例には次項に入れるべきものがあるが、形式が同じであるから便宜上ここに収めた。）

(B) 現象を表はすもの
○揖の音すなり　○田鶴が声すも　○霜曇りすとにかあらむ
○とどともすれば

(C) 存在を表はすもの　――ニシテ、の――が絶対的意義（時間空間）を有する場合（シテはアリの連用形に近い）
○家にして　○旅にして　○倭にしては　○我はここにして
○朝宵にして　○山陰にして（山陰は空間の名である）

(D) 指定を表はすもの（ナリの意）

(1) ――シテの場合
(イ)――ニシテの――が相対的意義を有する場合
○大丈夫にして　○君無しにして　○老人にして　○見ず久にして
(ロ)其他　○家遠くして　○宿は無くして　○独して見る験なし　○妹として二人作りし　○かくしてや

(2) 形容詞語幹＋ミ＋スの場合。（万葉の例全部について考へる）
○行方なみ我がする時に三二八九　○絶ゆと言はば詫びしみせむと六四　○我ぞ勝りていぶかしみする三一〇六　○花橘を乏しみし一九八四　○袖の別れを難みして　五例とも能動的意志的に解すべきでなく　○風吹かむとす記　が「吹くべき情勢にあり」の意味であるのに近く「詫しくあり」「難くあり」と訳して当る処である。なほ「乏しみし」の例に限って「し」を強意助詞と解する説(10)があるが賛成しがたい。○今のまさかも友愛しみすれ四〇八八　能動的に解すると功利的目的の懇親会になる。「と感ずる」の意味である。○人目難みすな二七六四　「と思ふな」の意味で、やや判断作用が加はる。前の例までは指定と解されるが、本例は動作と見るべきである。○わが思ふ子を懐しみせよ四〇〇九　これは明瞭に意志的能動的の動作である。後世のヨミス・ナミス・サミス・ウンズ・サンズ・安ンズの類は悉く能動的動作である。

(3) ニ（否定）スの場合
○出でがてにせしを　○得がてにすとふ　○見れど飽かにせむ三九〇二　○行方知らにす一六七　後の二例はもとより前の二例も能動的意味はない。「出づるに（得るに）勝へずあり」の意であり、後のは「飽かずあらむ」「知らずあり」の意であって、否定的指定である。知らにす（不知爾為）が知ラズとなったのであるから、ズは否定に判断の加はった形式で、ズ・ヌ・ネといふ活用体系は統制の取れたものではなかったのである。

(4) 其他　○何すれぞ　○何せむに　ともに動作ではない。上のは「如何にあればぞ」「いかなる理由ありてか」、下のは「如何ならむ故に」の意である。○しかすがに「然ある処に一方では」○併しながら「然ありながら」「然あるままそっくり」みんな指定である。

(5) 助動詞キの活用形と言はれるセ　○人にありせば　○箆打つ人の無かりせば　○足引の山より来せば二一四八　構造上は

「尽きせず」「絶えすれ」に類し、意味は「あるならば」「来るならば」であって、指定と見ることが出来る。過去とか回想とかの部に入れることには賛成できない。○降りにせば（零餘西者）三二四　助動詞のニにつづくのは、セ（ス）が弱まって指定詞（辞）になったからで回想と見るべき理由にはならぬ(11)。「降りにし」との連絡も考へられるが、回想のシも元来指定の意味だったのではないか。尤も通時論と共時論とを交錯させるのは控へたがよいかも知れぬ。

禁止のナに呼応するソ　○野をばな焼きそ　○散りな乱りそ　○痛くなびそ　これら「ナ――ソ」形式のものを「雲な棚引き」「な思ひ吾が背」の類と比較するに、ソが無くても禁止の意味は表現されるが、ソのある場合は、ナ（否定）焼き（動作の個性）ソ（動作の形式と命令）と分業的になり、更に○雪な踏みそね　○雷な鳴りそね　の場合は、ソ（動作の形式）ネ（誂へ）と分担が細かくなって居る。

このソは大野氏の説かれる通り(12)左変の活用形と考へられる。誂へのネは「心示さね」の様に未然形を受けるきまりであるからソで終る場合は命令形、ネの続く場合は未然形といふことになる。ソを左変の活用形と見る根拠は、

(イ)　セ・シ・スとソとであるからサ行の系列である。

(ロ)　どちらも動詞の連用形を受ける。

(ハ)　連用形を受ける語は名詞（打ち橋、思ひ妻）でなければ用言であると大体考へてよい。

(ニ)　連用形を受ける、時の助動詞ツ・ヌ・キは動詞に還元される。ケリ・ケムの頭音はキと同様に来であり、タリもテ（ツ）アリである。

(ホ)　助詞のテ・ツ、はツに還元される。外にナガラとガテラとあるが、後者はカタ（片）という名詞、前者は之柄であらうからこれだけが唯一の例外となる。

(ヘ)　連用形に接する希求のコソは係助詞のコソと同語だといふ説(13)があるが全然意味が違ふ。一方コス・コセと形態・意味・接続が同じであり、万葉の「いで吾が騎早くゆきこそ」三二五四が催馬楽で「ゆきこせ」となって居る例もあって、コソが動詞であったことは争ふ余地がない。この事はソが動詞であった傍証となる(14)。

(ト)　ソが付属語的立場から上の動詞を補助する点は「尽きせず」「絶えせむ」と同様である。

(チ)　鎮火祭の祝詞に此能悪子乃心荒比曾波水神・瓫・埴山姫・川菜乎持氏鎮奉礼とある。「此の悪い子の心が荒びるならば水の神は瓫を埴山姫は川菜を持って鎮め奉れ」の意味であることは明かである。荒比曾波（あらびそば）は祝詞正訓の字面で、いま自分は諸本を参照する便宜を持たないが、延喜式諸本や祝詞の単行本の文字が正訓の通りであったらうことは註釈者たちの態度によって伺はれる。然るに次田潤氏は「九条家本を見るに「曾」は「南」の草書に記してゐるらしく見えるから」と言って本文を荒比南波と改められた。しかしこれは由々しき大事である。九条家本の文字を「留」と見た人もあるらしく古典全集では仮名交り文を「荒びるは」として居るがこれもいけない。「荒びるは」では文を成さないのである。大野氏が九条家本の写真版を模写して下さったものを見ると、極度

の草体で判定困難であるが、やはり「曾」と見るべきものの様である。他の諸本に異伝がない以上、ここは「曾」と決定してよいと思ふ。解釈は鈴木重胤の曾はセの義であるといふ説で十分である。これでソネの外に、未然形ソの例が一つ加ったわけである。

(リ) 奈孤悲曾余四〇二とヨのついた例もある。もちろん命令形である。

右の通りで「ナ――ソ」のソが左変の活用形であったことが明らかになったと思ふ。活用は

ソ シ ス スル スレ ソセ

で、未然形と命令形とが各二つあったことになる。これは大野氏の言はれる通りソが古く、ソからセに転じたものと考へられる

左変の話史　自分は来は命令形から出発した、而してコ(来)はコ(此)であると推定した。スもこれと同じく命令形ソから出発したと考へる。そして語源も来(コ)の場合に似て指示詞のソ(其)であったと思ふのである。コ(来)が「ここへ近寄れ」であったのに対し、ソ(為)は「それを〇〇せよ」であった。〇〇は場合に応じて如何なる動作でもあり得た。打て・突け・持ち来れ等々コ(来)が今日まで命脈を保ち得たのに、ソ(為)には早くセといふ代りが出来、奈良時代において既にスの活用体系から落伍した理由

(イ) コ(来)の場合はいつまでも意味上コ(此処)との関係が切れない。来るとはこちらへ近寄ることであるから。然るにソ(為)の場合は事情が違ふ。「〇〇せよ」の対象が常にソ(其)であるわけでなく場合によって変る上に、動作そのものが千差万別であった。従って語源の音韻の牽引がなかった。

(ロ) 活用形にオ韻を持つものが、外にはコ(来)しかなかった。恐らく優勢なる四段活用の命令形などの影響によって So/Se と転じたものであらう。そして「ソ」は助詞的存在として姿をとどめて居たのであらう。

なほ「ナ――ソ」のソは連用形を受けるきまりであるのに、ナセソ(多波和射奈世曾四四八七)があって例外となる。これはシ・シカが未然形セを受けるのと一緒に古い形式の残存、いはば未然形の連用形への移譲留保である。またこの場合、動詞の方は新形付属語の方は旧形なのである。

(付記)　金沢博士は、為は連用形を除けば下二段活と同じであること、禁止のナ、助動詞のシ、シロの接続する場合にセとなることを理由として、もと下二段活であったこと疑ひなしとし、また為(ス)から転じた使役敬語助動詞のスが古くは四段活であったことを理由にして、為(ス)はもと四段で、後に類推で下二段に、最後に今の活用になったものと推定せられた。しかし(1)既述の如く左変のセと下二段のセとでは母音を異にして居たと思はれ、(2)為(ス)の一語に限って連用形がシとなった理由が説明されて居ない。(3)為は基本的の動詞であって下二段よりは成立がずっと早いと考へられるから、同博士の説には従はれない。(4)助動詞のスが四段または下二段の活用をなしたのは付属語となって特殊の職分(敬語使役)を持ち、或は単語の成分(サ行四段、サ行下二段の語尾)となるとともに、四段活等の勢力に同化されたのである。

備考

(1) 共通形の名は永田吉太郎「動詞語形の発達について」(国語と国文学 十三ノ五)に従った。これは必要のある名称と思ふ。同じ形態に対して論理上背反する二つの名を与へて居ることについては時々反省の必要がある。本居春庭の活用表に、四段・上一段の終止と連体、一段・二段の未然と連用の間に境の線が画されて居ないのは注意に値する。

(2) 上代の動詞語尾の母音の音価については大野晋氏の「日本語の動詞の活用形の起源について」(国語と国文学 二十八年六月号)に従ふ。

(3) 黒沢翁満の「言霊のしるべ」では加変左変を合せて三段活としてある。明治以後では山田博士等。

(4) ヲリ(居)の語源はキアリだとするのが通説だと思ふが音韻上の無理がある、恐らくヲアリから来たのであらう。ヲは坐の意味だった。ヲアリがa脱でヲリになった。意味は「坐しあり」古代の用例は大抵この意味。だからタテリに対してはヲリといった。また一方では起コから起キが、落トから落チが出来たやうに、ヲからキ(居)が出来たのだと思はれる。キの意味はスワルこと。ハベリは這ヒアリだといふ。やや不安があるが下部がアリであることは疑ひない。イマスカリは中は分らないが、上がイマスで下がアリであることは確かである。

(5) 本居春庭は左行変格に二十二語を掲げ、自身でス・オハスの二語に絞った。オハスについては大槻博士が疑問を出され山田博士が左変でないことを立証された。松下博士は此の二語の外にガヘンズをあげられた、語源と文法学との関係についての考へからであるが、この行き方からはウンズやサミスもあげねばなるまい。本稿は語源の如何に重くから、複合語は取らない。

(6) 上一段はカナハマヤワの六行に活行すると言はれて居たが橋本博士により、上代ではヒ(乾)キ(居)などが上二段活用であったことが明かになった。

(7) 現レから在リに転じたといふ説は永田氏の前記論文に見える。

(8) 大野氏前記論文。

(9) 終止形の欄に二形を掲ぐべしとする説も永田氏の論文に見える。

(10) 時枝博士「日本文法文語篇」

(11) 山田博士「奈良朝文法史」

(12) 大野氏前記論文。

(13) 山田博士の説。

(14) 島根県中等教育研究会編「国語漢文研究録」(昭和十一年)に掲載した「希望のコソは動詞であった」(筆者)に詳論した。